

『墨子閒詁』における『爾雅』の利用

關 清 孝

目次

はじめに

一、『墨子閒詁』の成立と注釋方法

二、孫詒讓の『爾雅』への言說

おわりに

はじめに

光緒三十年に、聚珍版が刷られてからさらに訂正に十年の歳月を費やした『墨子閒詁』が刊行された⁽¹⁾。この書は兪樾に「墨子有りて自り以來、未だ此の書有らざるなり」と墨子學始まって以來の大著であると稱せられ、刊行直後から高い評價が與えられた。この兪樾の評に對して吳毓江は褒めすぎではない（「非過譽也」）と述べ、同時に『墨子閒詁』に對しても「博洽矜慎にして、允に名作に推す」と稱讚している⁽³⁾。

近年では、河崎孝治氏の「墨子校注摘要」⁽⁴⁾が「從來の清朝學者の成果を集大成した墨子校注の白眉で、考證該博、此

の書によつて墨子學は大きく展開したと云つてよい」と述べ、また、鄭杰文氏の『二十世紀墨學研究史』⁽⁵⁾も、「二千年にわたる『墨子』研究の總決算といえよう」と述べている。このように、基本的に『墨子閒詁』への評價にかわりはないようである。

しかし、批判がないわけではない。たとえば、顧實は次のように批評する。

此の書實に乾嘉以來の諸家校注の大成を集む。然れども墨子の全書に於ては姑く深論する勿し。即ち辯經を以てして言へば、文字を贈刪竄易して、尙ほ誤るる者有り。其の句讀を明らかにせず、其の文義に通ぜざるを以てなり。見る所の善本は、亦た甚だしくは多からず。⁽⁶⁾

顧實は清朝の成果を大成したことについて一定の評価を示すものの「辯經」、つまり、經上下篇・經說上下篇については、善本を十分に搜集せずに勝手に文字を改めていることを擧げて批判している。孫詒讓が校勘に用いた舊本に不備があることは、王世傳「《墨子閒詁》校勘述略」⁽⁷⁾も指摘し、顧實の批判に従っている。ちなみに經上下篇・經說上下篇および大取篇・小取篇の計六篇は、理念や物の分別を言語定義している篇であり、訓詁や名家などとの關係が以前より指摘されている部分である。

さて、孫詒讓は『清代樸學大師列傳』では、皖派經學家列傳と同時に小學家列傳にも名を連ねている。⁽⁸⁾しかし、小學家としての孫詒讓の研究は、従來ではほとんどなされてこなかった。⁽⁹⁾また、彼の注釋よりも、むしろ彼の注釋を利用して注釋對象へと目を向けているのも事實であろう。

この孫詒讓の小學を考察することは、孫詒讓自身の學問體系を考察する上でも重要であると考えられる。またこのことは、

同時に經上下篇・經說上下篇の部分と訓詁との關係が指摘されていることから、さきの『墨子閒詁』への批判を再検討することができる。と考える。

そこで、本稿では、はじめに『墨子閒詁』における小學書の利用體系を考え、後半では孫詒讓が『墨子』を読むのに小學書の中でも特に『爾雅』に注目していたこと、そして、この書をどの様に利用したのかを見ていきたい。

一、『墨子閒詁』の成立と注釋方法

『墨子閒詁』成立以前には、畢沅の『墨子注』や王念孫による『墨子雜誌』が存在していた。『墨子閒詁』はもちろんこれらの成果に基づき作成されたものである。そして、『墨子閒詁』以降に『墨子』を校注した書には、張純一『墨子集解』や吳毓江『墨子校注』など枚擧にいとまがない。

本章では、これら『墨子閒詁』の前後に著された『墨子』の校注書と『墨子閒詁』の注釋の方法を比較することによって、墨子學における『墨子閒詁』の特徴を確認することを目的とする。ただしテキスト全體を比較すると繁雜になる恐れがあるので、特に序を中心に見ていく。

孫詒讓が自序で次のように述べているように、『墨子閒詁』は畢沅『墨子注』に基づき作られた。

畢・王諸家の校訓略ぼ備はる。然れども亦た遺失無からず。

このように畢沅・王念孫などによる『墨子』の校注には誤りが多いことを、『墨子閒詁』作成の動機としている。それでは、畢沅や王念孫の『墨子』校注の方法とはどのようなものであったのであろうか。以下に見ていきたい。

畢沅の『墨子注』は、今本と『道藏』中の『墨子』はともに宋本に基づくことを説いた後で次のように述べる。¹²⁾

今、上 四庫館を開き、天下の遺書を求む。兩江總督採進本有り。謹みて案ずるに亦た此の本と同じ。此の本自り以外、明刻本有るも、其れ字見ること少し。¹³⁾

四庫全書に收められた版本は、『道藏』中の『墨子』と同系統であること、そして、他の古本には明版があるが、見るべき箇所が少ないことが述べられる。こうして畢沅は校注に用いる底本を『道藏』と同系統の版本である今本にしたこと、さらにはその根拠付けしているのである。そして、この後では自分よりも早く『墨子』を校した盧文昭・孫星衍を挙げ、その後で以下のように述べる。

沅 始めて其の成を集め、因りて遍なく唐・宋類書、古今傳注の引く所を覽て、其の訛謬を正し、又知聞を以て其の惑を疏通す。乾隆壬寅八月自り癸卯十月に至るまで、一歳を踰えて書成る。¹⁴⁾

つまり、盧文昭や孫星衍の校本、類書、他書の注に引用された文をもって、先程底本とした『道藏』中の『墨子』を校勘したということである。

このように畢沅は『墨子』を校注するにあたっては善本を底本とし、他のテキストを用いて交換するという方法を採用したと主張している。この方法は、古籍を校注する上での一般的な方法ともいえるであろう。それでは、孫詒讓『墨子閒詁』は畢沅の方法をそのまま踏襲したのであろうか。「墨子閒詁序」では、『墨子』のテキストとしての状況を次の

ように分析する。

漢晉以降、其の學幾んど絶へて、書僅かに存す。然して之を治むる者殊に尠し。故に捥誤尤も校す可からず。而して古字古言轉た多くして、沿襲未だ改めず。形聲・通段の原を精究するに非ざれば、其の讀を通ずるに由し無きなり。⁶⁵⁾

漢晉以來、『墨子』の學は途絶えてしまったので、そのためそのテキストは古字がそのまま残ることになってしまった。そして古字を解釋するためには形聲や通假などに通じていなければならないと述べる。この古字の多い『墨子』に對しての讀解は「余昔讐覽を事とし、旁く衆家を撫ひ、善を擇びて從ふ⁶⁶⁾」と述べ、この後七種のテキストや注釋書の紹介し、これらによって校勘していることが示されている。他のテキストや先學の成果によって校勘する方法は畢沅と同様であるが、しかしこの後では、その方法だけでは補えない箇所があることが述べられる。

經說兵法の諸篇、文尤も奧衍凌襍、舊校を檢攬するに疑滯殊に衆し。⁶⁷⁾

經上下篇・經說上下篇ならびに守城に關する十一篇を讀むのに、今までの研究成果ではまったく役に立たないことが指摘される。そしてこの點があるために次のような方法を掲げる。

先秦諸子の譌舛讀む可からざるもの、未だ此の書より甚だしき者有らざるなり。今謹んで爾雅・說文に依りて、其

の訓故を正し、古文・篆・隸により、其の文字を校す。⁽¹⁰⁾

誤った讀みに對しては、『爾雅』と『説文』に基づいて正し、また、文字の誤りは書體から改めると、孫詒讓は單純に善本のみに従うのではなく、訓詁と字形の面から讀み解いていくと述べている。このように、畢沅が宋版に基づく版本を底本に選び、そして校本や他のテキストによって校訂していったのに對し、孫詒讓は畢沅が用いた方法の他にも、小學書に依據し『墨子』の字義を追求する方法も用いていたのである。この方法は『墨子閒詁』以後の校注書でも見られるのであろうか。

それでは、次に『墨子閒詁』の後約五十年後の民國三十二年に出版された吳毓江『墨子校注』の方法を見ていこう。『墨子校注』の最大の特徴は徹底してテキストにこだわったことにある。王兆榮「墨子校注王敍」は「現存の古刊本墨子に對して、殆ど已に網羅し遺無し」とまで述べている。⁽¹¹⁾その方法を、吳毓江は「墨子校注自敍」で次の三點に歸結させている。⁽¹²⁾

- 一曰、搜集異本
- 二曰、徵引善本
- 三曰、尋求例證

河崎孝治「墨子校注校補序」によれば、「異本の搜集」とは、中國・日本に残る十八種以上もの版本を用いたことであり、「善本の徵引」とは、過ちの寡きを庶幾い、引用する類書等の書籍も善本を用いたことであり、「例證の尋求」と

は、墨子書中に例證を求め、次に時代の相懸遠せざる書をもって相參證すること、である。そして、吳毓江はこの三項目を挙げた後で次のように述べ、その手法の妥當性を主張する。

古書を読む者、多く異本を備ふるに非ざれば、則ち校勘由る無く、善本を徴引するに非ざれば、則ち援據信じ難く、例證を旁求するに非ざれば、則ち比類廣からず。此の三者を審かにし、慎んで之を用ふれば、則ち羨を刪り、脱を補ひ、譌を訂し、錯を移し、漫に至らざるに庶し。

自らが挙げた三項目を用いれば、古籍の誤りを訂正することができるという。ここで吳毓江が掲げている三點は、いずれもテキスト間による文字の違いに基づく校勘であり。訓詁による讀みの訂正はうかがえない。他にも例えば張純一『墨子集解』なども、『墨子閒詁』の不備を『墨子閒詁』以降の研究成果と孫詒讓未見の版本によって補うと述べている。『墨子閒詁』以降で『墨子閒詁』同様の方法を序で謳っているのは、管見では『說文解字』の研究で知られる馬宗霍の『墨子閒詁參正』だけである。この書は札記であるが、序によれば、『墨子』中の疑義有る二百九十八條について、『說文解字』『爾雅』『廣雅』などの他、經書・史書・諸子などの書を用いて、「詁訓を釋し、疑難を解き、文義を申堯」しようとしたものとしている。

このように見てくると、孫詒讓『墨子閒詁』の方法、すなわち『爾雅』や『說文解字』などの小學書に基づき訓詁を正すという方法は、各書の序を通觀していくと他の『墨子』の校注書には、ほとんど見られないことが明らかになる。そしてそのことは、つまり『墨子閒詁』の特徴ということができよう。

たしかに諸子ばかりでなく、古籍に注するとき『爾雅』・『說文解字』をはじめとする小學書を利用し、古字の義を

明らかにする方法は伝統的であり、かつ一般的である。しかし、『墨子』に限って見てみると、そのことを「自序」等で明確に表明しているのは、孫詒讓が始めてのようである。

それでは『墨子』以外の書においては、どうであったのであろうか。たとえば王先謙『荀子集解』も序を見る限りでは、『爾雅』と『說文解字』などに基づき訓詁を正したとは記されていない。

顧ふに其の書 僅かに楊倞注有るも、未だ善を盡すと爲さず。近世通行の嘉善謝氏校本、去取亦た時に疏舛有り。宿儒大師、匡益する所多し。家居事少し。輒ち旁く諸家の説を采り、荀子集解一書を爲る。

『荀子』には、古注が存在するが決して良いとはい切れないこと、また近世の通行本に誤りが多いことなどを執筆の動機として挙げ、そのため諸家の見解を集め『荀子集解』を作り上げたことを述べる。そしてその後では、校注の方法を次のように記す。

管窺の及ぶ所、閒く亦た附載す。敢て荀書の精意に於て、發明する所有りと謂はず。而れども楊謝の疑辭を析し、宋・元の定本を酌むに於て、庶幾くは一得無きにあらず。

自分の校注には新しい見解はないが、宋版と元版を斟酌し、楊倞注と謝氏校本の誤りを明らかにしたこと等に對して自信をのぞかせている。また、このような序の體裁は王先慎の『韓非子集解』においても同様に確認できる。『韓非子集解』の「辯言」では、宋の乾道本を紹介し、このテキストの注が不十分であることを指摘した後で、自らの注釋の姿勢

を次のように記す。

因て旁く諸説を采り、閒に己が見を附し、韓非子集解一書と爲す。其の文は宋の乾道本を以て主と爲し、閒に譌誤有れば、它本に據り焉を訂正す。²⁴

基本的に善本である乾道本を底本とすること、そして、誤りの部分は他のテキストに従い改めることである。ここにおいても、テキストに基づく校勘を述べるばかりである。確かに兩書とも諸子を校注するに、古代漢語の音韻體系を根底にすえた經書解釋の方法を以て注解したといわれている。注解の内容を読み解いていけば、その通りであり、そのことに異論はないであろうが、注意しなければならぬのは『墨子閒詁』のように序においてその方法を明確に記していないということである。逆を返せば、『墨子閒詁』はテキスト面で不十分であることを認識していたため、自らの方法に對して自覺的であり、それを全面に出さざるを得なかったともいえよう。

畢沅や吳毓江は、古本・善本に基づき『墨子』本文を校訂していったのに對し、孫詒讓は小學書に依據し『墨子』の字義を追求したのである。確かに後の時代に作られた『墨子校注』などの書に比べれば、校勘に用いるテキストの収集は不完全であることは否めない。しかし、その部分を『爾雅』や『說文解字』の小學書による文字解釋によって補おうとしていたのは明らかであろう。むしろ、そのことが該書の特徴といえるであろう。このように見てくると、はじめに挙げた顧實の批判や顧實を襲う論は、必ずしも當を得ているとは言い難いと思われる。²⁵

ここまでは、『墨子閒詁』の注釋の特徴が、『說文解字』や『爾雅』に依據する文字解釋にあるということを確認した。以下では、今まで確認したその姿勢はいずれの影響にあるのか、また『墨子閒詁』に引用されている『說文解字』と

『爾雅』を比較することによって、孫詒讓のこの二書に對する認識の違いを見ていきたい。

まず『墨子閒詁』というタイトルから考察していききたい。『墨子閒詁』の「閒詁」は、後漢の許慎による『淮南子』の注『鴻烈閒詁』を襲ったものである。そのことについて孫詒讓は次のように記す。

昔、許叔重 淮南子の書に注するや、題して鴻烈閒詁と曰ふ。閒とは其の疑悟を發し、詁とは其の訓釋を正すなり。今字誼に於ては、多く許學に遵ふ。故に遂に用て題著す。

自著の表題に「閒詁」を用いたことからこれまでの確認ができよう。また、「許學」に従うのであれば、單純に『墨子閒詁』の文字解釋の多くは許慎が撰した『說文解字』によっていると推測できよう。

しかし、『說文解字』に基づき『墨子』中の難解な文を読み解くと述べたのは、孫詒讓がはじめてではない。孫詒讓の師俞樾が師事した王念孫である。王念孫の『讀書雜誌』には『墨子』を校勘した篇（『墨子雜誌』）が收められている。王念孫の「墨子雜誌」の叙には次のようにある。

蓋し墨子 樂を非り、儒を非りて、久しく學者の黜くる所と爲る。故に今に至る迄に校本無し。而して脱誤一には是に至る。然れども是の書の校本無きを以てして脱誤読み難き。亦た校本無きを以てして古字未だ改まらざれば、説文と相證す可し。

讀むことが困難な古字は『說文解字』によって理解すべきであると述べている。そして、この後では具體例を列挙して

いる。そこでは、「傳寫之訛」・「借字」・「古文」・「形相似」などを、『説文解字』によって解している。そこで、王念孫の方法を把握するために「墨子雜誌敘」をもう少し細かく見ていこう。

墨子書舊と注釋無く、亦た校本無し。故に脱誤讀む可からず。近時、盧氏抱經・孫氏淵如に至りて、始めて校本有りて、是正する所多し。乾隆癸卯、畢氏弇山重ねて校訂を加へ、正す所復た前より多し。然るに尙ほ未だ該備せず、且つ誤改誤釋する者多し。予寡昧を揣らず、復た各本及び群書治要諸書の引く所を合して、詳に校正を爲す。

王念孫は、畢沅『墨子注』は不備・誤改・誤譯が多いので、改めて校正を加える必要があることを解く。そして、この後で具體的な方法を述べる。

是の書傳刻の本、唯だ道藏本のみ最優爲り。其の藏本は未だ誤らずして、佗本皆誤る。及び盧・畢・孫三家已に訂正を加ふる者、皆復び羅列せず。唯だ舊校の未だ及ばざる所、及び校する所尙ほ未だ當らざる者有り、復た考正を加ふ。是の書錯簡甚だ多し。

道藏本を底本として、畢沅・盧文昭・孫星衍の未だ及ばなかった所と、彼らが校したものの當を得ていない所とに考察を加えたという。また、前の文で「各本及び群書治要諸書の引く所」によって校正をしたことから、王念孫は基本的に畢沅の方法を受け継ぎながらも、新たな方法、すなわち『説文解字』によって古字を解するという方法を加えたと見ることができよう。そして、孫詒讓にいたって、その新たな面がさらに擴大したと推測できる。それが「許學に遵

ふ」であり、『墨子閒詁』という名稱であることとらえることが可能であろう。周祖謨が「清人は特に許慎の『説文解字』を特に重視していた」と述べているように、清朝の學者が、特に『説文解字』を重んじていたことは周知の通りである。その具體的な現れとして、王念孫の『墨子』解釋の方法、そして、それを引き継ぎ發展させた孫詒讓の『墨子閒詁』の方法から見てとれる。

二、孫詒讓の『爾雅』への言説

前章では、王念孫が用いた方法、つまり『説文解字』を用いて文字を解釋する方法を『墨子閒詁』はさらに押しすすめ、『爾雅』をも俎上に登せたことを確認した。それでは、『墨子閒詁』の注中に用いられた『爾雅』にはどのような特徴があるのであろうか。本章では、孫詒讓によって記された『墨子閒詁』以外の著作に見られる『爾雅』への言及、また『墨子閒詁』に引用された『爾雅』郭璞注から考察を試みる。

さて、『墨子閒詁』に引用された文献で最も多いのは『説文解字』である。このことも前章の證左となるが、しかし、看過できないのは、二番目に多い『爾雅』の存在である。引用數でいえば『説文解字』は百四十七條に對して、『爾雅』は八十條である。しかし、孫詒讓が「經說兵法の諸篇、文尤も奥衍凌襍、舊校を檢攬するに疑滯殊に衆し」と述べた經上下篇・經說上下篇のみをとって見れば、『説文解字』が二十八條に對して、『爾雅』は二十條とその割合は低くなる。また、注を細かく読んでいくと、數だけでは見過ごせないところがいくつか見受けられる。

例えば、次の經上篇の文章などがそれである。

「本文」俱、所然也。

〔注〕 吳鈔本無然字。畢云、「然猶順、佶之言貳、或爲尒字假音。說文云『尒、必然也』」。

案、爾雅釋言云「佶、貳也」、郭注云「佶次爲副貳」、次貳與順義近。畢疑爲尒之假音、則非。

畢沅が『說文解字』に基づき、説を立てているのに對して、孫詒讓は『爾雅』並びに郭璞の注を用いて否定しているのである。このような例は、經上下篇・經說上下篇以外の篇でも見られる。

〔本文〕 法儀第四

〔注〕 畢云、「法、說文云『灋、刑也、平之如水、從水・廌、所以觸不直者去之、法今文省。』此借爲法度之義。

儀、義如渾天儀之儀。說文云『儀、軼也』、儀與儀音相近。又說文云『儀、度也』、亦通。

詒讓案、爾雅釋詁云「儀、軼也」與說文「儀」說解同。管子形勢解篇云「法度者萬民之儀表也」。此篇所論、蓋天志之餘義。

「法儀第四」という文に注して、まず畢沅注を引用する。「儀」に對して畢沅注は次のように述べる。『儀』の義は渾天儀の儀の如し。說文に云ふ『儀は軼なり』と。儀と儀とは音相近し。又說文に『儀は度なり』と云ふも、亦た通づ」と。それに對して孫詒讓は『爾雅』釋詁篇の文「儀は軼なり」を引用し、「說文の儀説と解同じ」と述べる。ここは『說文解字』のみでは二說生じてしまうのを『爾雅』を引用することによって確定させているのである。

このような例はいくつも見られるので、一つ一つ取り上げることがはさけるが、このような態度を端的にあらわしているのが、前章にて確認した「序」の「爾雅・說文に依りて、其の訓故を正」すという文章であると推測される。王念孫

が『説文解字』のみを掲げていたのに對して、孫詒讓は兩書を並べて擧げている。孫詒讓は王念孫が新たに表明した面、すなわち版本による校勘では克服しきれない部分に對し『説文解字』を用い文字から考察する方法に、さらに『爾雅』を加えることによって、より確かなものにしようとしたと考えられる。また、先程の「爾雅・説文に依りて、其の訓故を正」すという文章と酷似する文は『周禮正義』の序でも確認できる。

詒讓 衣に勝へて傳に就きてより、先ず太僕君 即ち授くるに此の經を以てす。而れども鄭注は簡奧、賈疏は疎略なるを以て、未だ盡くは通づること能はざるなり。既に長じて、略ぼ漢儒の經を治むるの家法を窺ふ。乃ち爾雅・説文を以て、其の訓詁を正し、禮記大小戴記を以て、其の制度を證し、研禱すること案載、經注の微義に於て、略ぼ寤る所有り。⁸⁰⁾

漢儒がおこなっていた方法、つまり『爾雅』と『説文解字』によって經文の文字の意味や讀みを知ることができ、『禮記』等によって記載されている制度を證明するという方法に従うと、このことによって經を讀むことができたと述べている。古の文章に接するのに『爾雅』と『説文解字』に依據し讀み解いていくという方法は、『墨子閒詁』と同様である。ここからも孫詒讓が『爾雅』と『説文解字』を併尊していたことがうかがえる。

さて、孫星衍は畢沅『墨子注』に收められている「墨子注後序」において『爾雅』に言及している。しかし、「經上下は略ぼ爾雅の釋詁の文に似たり」と述べているように、經・經說篇と『爾雅』との類似性はすでに指摘されている。ここでは文體の類似性は指摘されているものの、『墨子』の讀解に文體の似た『爾雅』を援用することは記されていない。それを明確に打ち出すには『墨子閒詁』の登場まで待たなければならなかったのである。

次に孫詒讓の『爾雅』に對する言説から、彼の『爾雅』への認識を確認したい。しかし残念なことに、王念孫が「昔者周公禮を制し樂を作り、爰に爾雅を著す。其の後七十子の徒、漢初の綴經の士、遞ひに補益有り」と述べ、『爾雅』を周公の作、および孔子門弟の増補になるものとするような言説は見られない。また、逆に戴震のような、『爾雅』の作者を周公や孔子等に假託する説を否定する態度も見られない。⁸³『爾雅』を聖人の作として神聖視していたか、それとは反對に他の文獻と同等に見ていたのか、といったことは判断できないが、『爾雅』を重視していたことは事實のようである。『籀膏述林』に收められている「釋翼」の冒頭には次のようにある。

訓故とは即ち古の言語なり。其れ略ぼ『爾雅』に具はりて、詩書に散見す。

『墨子閒詁』の序において「爾雅・説文に依りて、其の訓故を正す」と述べ、『墨子』を讀むのに重要な要素であるとした「訓故」のおおよそは『爾雅』に備わっているとしているのである。この後では、字義は時代が降るにつれ増えるものであるから、「固より盡くは載すること能はず」とも述べているが、古籍の「訓故を正す」上で『爾雅』を重要視していたことにはかわりはないであろう。

また、同じく『籀膏述林』所收の「爾雅匡名補義」⁸⁴では、嚴元照『爾雅匡名』の遺闕三條取り上げて、改めて『爾雅』經文を校訂している。そのために『經典釋文』・『説文解字』・『太平御覽』や唐石經などを用いているのだが、その際に一番の決め手としていたのが郭璞注であったのである。しかも、邵晉涵・郝懿行が郭璞注に従わないことに對して「非」としていることにも注目したい。郭璞注が信頼すべきものである理由を孫詒讓は次のように述べる。

此れ尤も晉の時の本「嵩」に作るの埒證。郭注 自ずから是れ古本。今經文皆改めて「崧」に爲る。郭注は中嶽の名を僅かに改めざるを得るを以て、當に據りて以て訂正す。

この文では、郭璞注が「自ずから是れ古本」であるのだから、郭璞注のテキストは經文を校すのに足る資料であることを述べている。そして、この文章においては三條全てを郭璞注に基づき、『爾雅』經文を校訂しているのである。

また、同書所收「爾雅時善乘領義」においては、『爾雅』釋畜篇の「蝮叩鼻而長尾、時善乘領」という文について考察している。邢昺・邵晉涵『爾雅正義』・郝懿行『爾雅義疏』が「蝮」と「時」をそれぞれ獸名と解釋しているのに對して、郭璞注のみが、「蝮叩鼻而長尾、時善乘領」を一句とし、後半を「時に善く領に乗る」と解していることから、邢昺・邵晉涵・郝懿行らの説を誤りとしている。このように『爾雅』に依る際には、最新の成果であり、すでに評價を得ていた邵晉涵『爾雅正義』や郝懿行『爾雅義疏』の説にみだりにならうのではなかったのである。これらの『爾雅』に對する論述からは、諸注の中でも郭璞の注への信賴は絶大なものであったことが読みとれる。

清代になると、小學が盛んに行われ、『爾雅』に對しても戴震・邵晉涵・郝懿行をはじめ多くの成果をあげた。しかし、孫詒讓の記述を見る限りでは、しかも、郭璞注に基づき清朝の注を退けている。このような言説からも孫詒讓が『爾雅』を利用する際には、郭璞注の影響が大であったと想像できよう。

それでは、このことをふまえて、『墨子閒詁』に引用された『爾雅』、特に郭璞注に注目して、考察していきたい。

號令第六十九

〔本文〕 守案其署、擅入者、斷。城上日壹發席蓐。

〔注〕「日」上疑脫「三」字、後云「葆宮三日一發席蓐」。爾雅釋器云「蓐謂之茲」、郭注云「蓐席也」

號令篇の「守其の署を案ず。擅に入る者は、斷ず。城上は日に壹たび席蓐を發す」という文の「席蓐」について孫詒讓は注を附している。注では郭璞の注を介して、『墨子』本文の被注釋字と『爾雅』經文を結びつけている。郭璞注があるからこそ、『墨子』の「席蓐」を「しきもの」として解釋する妥當性が『爾雅』の經文によって證明されるのである。

非儒篇第三十九

〔本文〕決植。

〔注〕「決植」上疑有脫文。爾雅釋宮云「植謂之傳」、郭注云「戶持鎖植也。」

本文の「決植」の「植」に對して、『爾雅』釋宮篇の文章は「植之を傳と謂ふ」とだけ記しているが、郭璞注が「植」とは「戸の鎖を持つているもの」のことであるとして、「墨子」本文の「植」の形態が理解できるようになっている。この例においては、郭璞注の解説を引用するがために『爾雅』經文をも引用したとも見ることができよう。このように主に郭璞注の解を提示することを目的とする例や、郭璞注を併せて引用することによって『墨子』解釋に無理なく『爾雅』を用いている例などが見られる。邢昺の疏や他者の注を引用していないことから、孫詒讓の郭璞注への信賴が推測できる。

また、一般的に『墨子閒詁』は引用の精確さを稱せられている。しかし、『墨子閒詁』中に引用された、『爾雅』の郭璞注を検討すると、必ずしも原點に忠實ではなかった。次にその全四例を挙げる。

• 『墨子閒詁』非儒篇第三十九

〔本文〕決植。

〔注〕「決植」上疑有脫文。爾雅釋宮云「植謂之傳」、郭注云「戶持鎖植也。」

• 『爾雅』釋宮篇

〔經文〕植謂之傳、傳謂之突

〔郭注〕戶持鎖植也。見埤蒼。

• 『墨子閒詁』迎敵祠第六十八

〔本文〕堂密八。

〔注〕蓋堂爲多角形。爾雅釋山云「山如堂者密」。郭注引尸子云「不知堂密之有美縱」。

• 『爾雅』釋山篇

〔經文〕山如堂者密。〔郭注〕形如堂室者。尸子曰、「松柏之風、不知堂密之有美縱」

• 『墨子閒詁』號令第六十九

〔本文〕守案其署，擅入者，斷。城上日壹發席蓐，

〔注〕「日」上疑脫「三」字、後云「葆宮三日一發席蓐」。爾雅釋器云「蓐謂之茲」，郭注云「蓐席也」

• 『爾雅』釋器篇

〔經文〕蓐謂之茲。〔郭注〕公羊傳曰、「屬負茲」。茲者蓐席也。

・『墨子閒詁』襟守第七十

〔本文〕常令邊縣豫種畜芫、藝、烏喙、秣葉。

〔注〕詒讓案、說文艸部云「芫、魚毒也。」爾雅釋艸云「萌、春草」、郭注云「一名芒草」。

・『爾雅』釋艸篇

〔經文〕萌、春草。〔郭注〕一名芒草。本草云。

このように、郭璞注の引用に際して、不正確な箇所は全て郭璞注内で引用されている文献に關してである。『墨子閒詁』は郭璞注を引用するのに引用文を削る、もしくは、省略していることが確認できる。このことは、孫詒讓が『墨子閒詁』において郭璞注をどのような目的で利用したかの現れともいえる。つまり、郭璞注はあくまで『墨子』内の文字を解釋するための材料として引用することである。郭璞注内の訓詁解釋には關心が高かったが、『爾雅』經文の文章内容を具體的に示すために郭璞が他文献の文章を引用した箇所は無用であり、そのためにその部分は精確に引用する必要はなかったといえるであろう。このことは孫詒讓が『爾雅』の郭璞注を『墨子』本文の文字を訓詁解釋するための資として見なし、利用していたことの逆説的な證明になりうるであろう。

また、黄侃「爾雅略說」は「郭璞の言語を考證する方法は、すぐには繼承されなかったが、後に見直される時期が來て、清朝の諸家によって中興された」と述べている。⁸⁵⁾黄侃は具體例を擧げていないが、この「郭璞の言語を考證する方法」を孫詒讓は『墨子』の考證に利用している例はそれに當てはまるであろう。同時に古注の訓詁を尊重し、それに依據する方法は、考據學のあるべき姿と見ることも可能ではあるまいか。このような面で孫詒讓はまさしく清朝の考據學

における集大成者とも言えるのである。

おわりに

以上、『墨子閒詁』における『爾雅』の利用とその目的について考察した。その結果、『墨子閒詁』の特徴は『説文解字』や『爾雅』による古字解釋を掲げていることであり、従來の善本収集の不備を『墨子閒詁』の缺點として指摘する言説は、『墨子閒詁』の校注方法の本質からはずれていると述べた。そして次に、訓詁に對する關心の高さから『説文解字』ばかりでなく、『爾雅』並びに『爾雅』の郭璞注も重要視し積極的に利用していたこと、そしてそのことが「序」の「依爾雅・説文、正其訓故」という表現であることを確認した。

しかし、本稿で清朝の『墨子』學、もしくは孫詒讓の學問、そして、そこに『爾雅』がどのように関わったのかを提出しえたわけではない。また清朝の大師が『爾雅』をどのように利用していたのか考察しようとしながら、『墨子閒詁』という存在にこだわりすぎたきらいがある。また、『墨子閒詁』にこだわったのにもかかわらず、『墨子閒詁』が目指した「古字古言」の追及には目を向けていない。だが、出土資料が陸續として出現している現代においても、オリジナルの姿にたどりつくのに困難を極めている現実がある。そのため古典がどのような姿をしていたのかではなく、古典がどのように讀まれていたのか、に拘泥するしかなかったのである。これらはすべて今後の課題として本稿を結びたい。

(1) 朱芳圃『孫詒讓年譜』（商務印書館、一九二五年）に基づいた。

(2) 「蓋自有墨子以來、未有此書」（『墨子閒詁序』）

- (3) 吳毓江「墨子校注自敘」
- (4) 『大東文化大學漢學會誌』二十四號 一九八五年。
- (5) 二〇〇二年、清華大學出版社。「可以說《墨子閒詁》也是其前兩千年墨學研究的總結」(「引言 二十世紀墨學研究的前奏」)
- (6) 「此書實集乾嘉以來諸家校注之大成。然於墨子全書姑勿深論。即以辯經而言、贈刪竄易文字、尙有誤者。以不明其句讀、不通其文義也。所見善本、亦不甚多」(『墨子辯經講疏』自序)
- (7) 『文獻』一九八七年、第二期(總第三二期)。
- (8) 傳は皖派經學家列傳のみに記されている。
- (9) 胡奇光『中國小學史』(上海人民出版社、一九八七年)の「第五章 小學的終結—清代、十小學後殿孫詒讓與古文字學」など。
- (10) 清朝における『墨子』の校注史については、河崎孝治『墨子校注校補(一)』(一九七五年、自家版)の「序」や、河崎孝治「墨子校注摘要」(『大東文化大學漢學會誌』二十四號、一九八五年)・「墨子校注摘要(二)」(『大東文化大學漢學會誌』二十五號、一九八六年)を参照。
- (11) 「畢・王諸家校訓略備。然亦不無遺失。」(『墨子閒詁序』)
- (12) 畢沅『墨子注』が孫星衍の稿本にもとづいていることについては、河崎孝治「清朝に於ける墨子學—孫星衍校本と畢沅墨子注—」(『東方學』七五輯、一九八八年)を参照。
- (13) 「今上開四庫館、求天下遺書。有兩江總督探進本。謹案亦與此本同。自此本以外、有明刻本、其字少見。」
- (14) 「沅始集其成、因遍覽唐・宋類書、古今傳注所引、正其訛謬、又以知聞、疏通其惑。自乾隆壬寅八月至癸卯十

月、踰一歲而書成。」(畢沅「墨子注」)

(15) 「漢晉以降、其學幾絕、而書僅存。然治之者殊眇。故說誤尤不可校。而古字古言轉多、沿襲未改。非精究形聲・通段之原、無由通其讀也。」(「墨子閒詁序」)

(16) 「余昔事讐覽、旁摭衆家、擇善而從。」

(17) 「經說兵法諸篇、文尤奧衍凌襍、檢攬舊校疑滯殊衆。」

(18) 「先秦諸子之譌舛不可讀、未有甚於此書者。今謹依爾雅・說文、正其訓故、古文・篆・隸、校其文字。」

(19) 「對於現存古刊本墨子、殆已網羅無遺。」

(20) 各項目の細かい分析は、河崎孝治『墨子校注校補(一)』(一九七五年、自家版)の「序」を参照。

(21) 「讀古書者、非多備異本、則校勘無由、非徵引善本、則援據難信、非旁求例證、則比類不廣。審此三者、慎而用之、則刪羨、補脫、訂譌、移錯、庶不至漫。」

(22) 「顧其書僅有楊倞注有、未爲盡善。近世通行嘉善謝氏校本、去取亦時有疏舛。宿儒大師、多所匡益。家居少事。輒旁采諸家之說、爲荀子集解一書。」

(23) 「管窺所及、閒亦附載。不敢謂於荀書精意、有所發明。而於楊謝之疑辭、酌宋・元之定本、庶幾不無一得。」

(24) 「因旁采諸說、閒附己見、爲韓非子集解一書。其文以宋乾道本爲主、閒有譌誤、據它本訂正焉。」(韓非子集解辯言)

(25) 河崎孝治「墨子校注摘要」(『大東文化大學漢學會誌』二十四號、一九八五年)は、「善本の搜集に不備のあることが最大の缺點である」としている。

(26) 「昔、許叔重注淮南王書、題曰鴻烈閒詁。閒者發其疑悟、詁者正其訓釋。今於字誼、多遵許學。故遂用題著。」

〔墨子閒詁自序〕

(27) 「蓋墨子非樂・非儒、久爲學者所黜、故至今迄無校本、而脫誤一至於此。然是書以無校本而脫誤難讀、亦以無校本而古字未改、可與說文相證。」

(28) 「墨子書舊無注釋、亦無校本、故脫誤不可讀。至近時、盧氏抱經・孫氏淵如、始有校本、多所是正。乾隆癸卯、畢氏弇山重加校訂、所正復多於前。然尚未該備、且多誤改誤釋者。予不揣寡昧、復合各本及群書治要諸書所引、詳爲校正。」

(29) 「是書傳刻之本、唯道藏本爲最優、其藏本未誤、而佗本皆誤、及盧・畢・孫三家已加訂正者、皆不復羅列。唯舊校所未及、及所校尚有未當者、復加考正。是書錯簡甚多。」

(30) 周祖謨「中國訓詁學發展的歷史」『周祖謨語言文史論集』(一九八八年、浙江古籍出版社)や『周祖謨語言文字論集』(二〇〇〇年、人民教育出版社)などに所收)に「清人尊崇『漢學』、推崇許・鄭、對漢人的經傳注解都殫精極思、尋其義例。以爲要通經學、必通小學、因對許慎《說文》特別重視」とある。

(31) 「詒讓自勝衣就傳、先太僕君即授以此經。而以鄭注簡奧、賈疏疎略、未能盡通。既長、略窺漢儒治經家法、乃以爾雅・說文正其訓詁、以禮記・大小戴記證其制度。研禫繁載、於經注微義、略有所寤。」

(32) 「昔者周公制禮作樂、爰著爾雅。其後七十子徒、漢初綴經之士、遞有補益」(『廣雅疏證序』)

(33) 戴震「爾雅文字考序」(『戴東原集』所收)を参照。

(34) 『籀膏述林』卷三所收

(35) 「自郭氏以後、此風莫紹、無往不復、乃中興于清世諸師」(黃侃「爾雅略說」論爾雅之資糧)

〔追記〕校正時に朱瑞平『孫詒讓小學論』(二〇〇五年、商務印書館)を手にした。孫詒讓の訓詁學を具體的に

検証しており、本稿の助けとなる内容であった。該書の分析も含め、改めて検討する必要がある。